



湊の受難

父親の会の蜜事

父親の会の蜜事

学園にはPTA以外に「父親の会」と呼ばれる父親同士、教師と父親の親睦を深める会が存在する。

社長令息や政治家の令息などが通う学園の父親の会は政治的・経済的にも繋がりを深めるもので、活発に活動されていた。

今回も有名温泉旅館を借り切って、新年度初の父親の会が開催されていた。

「はじめまして。本年度より学園にお世話になりました、門倉湊と申します」

新任教師と言うことで参加することになった湊が挨拶をする。

あたたかい拍手で迎えられ、湊はホッと安堵の息をこぼした。

「いやあ、息子がいつも湊先生の話をしていますよ。噂通り綺麗な方だ」

父兄のひとりに声をかけられ、湊が照れたようにほほ笑む。

「ありがとうございます」

総会は特に問題なく終わり、入浴と休憩の後、夜から宴会が開かれることになっていた。

部屋に荷物を置いた湊が温泉へと足を向ける。

有名旅館の温泉は建物からゴンドラに乗り、山の奥にある秘湯と言われるところだった。

ゴンドラに乗り、露天風呂へ向かう。まだ誰も来ていないようで、広い露天風呂に湊が感嘆の声が上がる。

「わぁ」

木々に囲まれた秘湯、山奥と言うこともあり、まずは体を洗おうと洗い場に腰を下ろした時だった。

「湊先生もいらしてたんですね」

数人の男が露天風呂へとやってきて湊へと声をかけた。

「はい。高い山の上にある静かな温泉と聞きました」

「ほんとうに、ゴンドラであるが、以外には道のない温泉ですからね。」

湊先生、今から体を洗うんですか？」

「はい」

湊がにこりとほほ笑むと、男たちが湊を取り囲んだ。

「よければ、我々が湊先生を洗って差し上げますよ」

困惑顔になると、「そう堅くなり過ぎずリラックスをしてもらえばいいですよ」などと親切のように見せかけて体に手を伸ばす。

男たちに囲まれ逃げることの出来ない湊の両方の乳首とアナルに石鹸を纏った指が伸びてきた。

コリコリコリ……

「あああんっ♡おっぱいは、だめです……っ♡」

「湊先生おっぱいをいじられるのが好きだそうですね。息子から聞いていますよ」

ズボッ、ズボッ

「あっ♡あっ♡お尻も、やめて……あああ♡♡♡」

「湊先生のケツまんこ、指をぎゅうぎゅうに締め付けてますよ」

男二人の両手にそれぞれ左右の敏感乳首を狙われてしまう

（ああんっ♡おっぱい気持ちいい……っ）

「本の泡まみれになった手がアナルへヌプリと埋まっていく。ズボズボと抜き差しされ感じていると前立腺をトンと押された。

「あああ~~~~~~~~♡♡♡」

「ここが気持ちいいんですね」

「ちが、ああっ♡そこ、らめ……っ」

とは言いつつもその責められように目を細め体を震わせる。

へたりこんだ湊を横たわせると液体ソープが体に垂らされ、敏感な

乳首をコリコリと指で扱かれ、アナルを激しい手マンが襲う。

「あああっ♡あっ、ああんっ♡」

「たまらない喘ぎ顔ですな。なんていやらしい」

「あ、あっ♡もうイク……っ♡」

「まだですよ。ほら、もっと気持ちよくなりましょうね」

二本の指で激しく前立腺を責め立てられると湊はあっけなく潮を吹いた。

三人の男たちに体を弄られながらビクビクと体を震わせる湊の体を湯舟へ横たえさせると男たちは再び愛撫を再開したのだった。

男一が乳首を舌で転がし始めると他の二人が両の指を使いアナルの中をクチュクチュと音を立てて弄り始める。

そして舌先が起立した乳首を潰し、丁寧に責めながら濡れだしたアナルの浅いところから奥に埋め込み、そのガクガクと痙攣している内壁を中から刺激する。

「あぁっ♡あぁっ♡」

（あぁ……気持ちいい……もうだめえ♡）

湊は男たちの愛撫に身を任せていた。

「ん？乳首もケツまんこもひくついていますよ」

「あ、ぁんっ♡」

二本の指が前立腺を責め立てながら湊を繰り返し絶頂させる。

「湊先生のお尻はもう自分をおまんこだと思っっているのかもしれないなぁ」

指が刺激を与える場所は、排泄器官なのに感じる熱が背筋をぞくぞくとさせた。

（ああ♡またお尻っ、おまんこにされちゃう♡♡♡生徒だけじゃなくて、お父さんたちにも、えっちだってバレちゃう）

「あゝっ♡」

湊が腰を浮かせると男たちがクスクスと笑ったのだった。

三人が代わる代わる湊の体を弄りイかせていると、他の男たちも露天風呂へと入ってきた。

「おやおや、もうお楽しみですか」

「ええ、湊先生の体があまりにいやらしいものですから」

「そうそう知っていましたか？今日と明日、この風呂に特別な成分の

薬草を入れていただいているんです。粘膜に触れるとそれはもう感度があがるそうで。いかがです？ 湊先生がのぼせる前に、ここに竹筒がありますから先生のケツまんこに薬草湯を入れてみませんか？」

「それはいいですね」

「では私が」

一人の男が竹筒に薬草湯を溜めると、それをアナルへと押し当てた。

ズブズブ……ゴポオツ♡

（あぁ♡♡だめ、なんかムズムズする……♡♡♡♡いっばい注がれち

やう♡♡♡♡）

「あゝ♡♡」

湊が体をしならせながら喘ぐと男たちが笑ったのだった。

四本の手が乳首やアナルを弄り続け、媚薬成分の混じった湯を注ぎ、
湊の肉壁が疼きだしても男たちの手が止まることはなかったのだ。

「あっ♡あああっ♡」

「湊先生のケツまんこ、ずいぶん締め付けますね。そんなに手マンされるのが嬉しいんですね」

「あああっ♡ちがつ、あんっ♡」

ビクビクと震える湊の素直な様子に男たちは次々と声をかけた。

「バイブというのがありますね」

（ああっ♡待って）

湯桶から取り出されたものを見て別の男たちが笑ったのだ。玩具を使